

RWDで社会課題解決へ

京薬大 村木氏が受賞講演

医療薬学フォーラム

京都薬科大学臨床薬剤疫学分野の村木優一教授は6月20日、名古屋市中で開かれた医療薬学フォーラムで、佐藤記念医療貢献薬剤師賞の受賞講演を行った。病院薬剤師や大学教員として歩んできた道のりを振り返り、今後も「医療現場で蓄積される医療リアルワールドデータ(RWD)を用いた多様な社会課題の解決を実践したい」と語った。

村木氏は、京都薬科大学 患者に対して、臓器の拒絶大学院修士課程修了後、三重大学病院で肝胆臓移植外科病棟を担当する薬剤師と化に関わった経験から、そして業務に従事し、研究の後感染症領域の研究に力も取り組んだ。生体肝移植を入れるようになった。



全国203病院を対象とした横断研究を実施し、国内の医療機関における抗菌薬使用状況を調べたほか、販売量データをもとに日本全体の抗菌薬使用状況を提示する感染対策連携

共通プラットフォーム「J-SI PHE」の構築に反映された。医療リアルワールドデータを用いた診療報

酬制度や政策の評価にも取り組み、その一つとして特定薬剤治療管理料の算定の有無を指標に、バンコマイシンの有効性確保や有害事象防止に薬剤師の介入やTDMが有効であることを明らかにした。

村木氏は「RWDは一人ひとりの患者に行われた治療の結果の集合体で、様々

な医療者が関わった結果でもある」と述べ、適切なタイミングでRWDを解析することが重要になると指摘。今後もRWDを用いて社会課題の解決を実践するだけでなく、「臨床・疫学研究を実践できる薬学生・薬剤師を育成し、医療薬学のさらなる発展に貢献したい」と語った。